

家庭と教室を繋ぐために教師ができること

－ 授業の課題提示の工夫に焦点を当てて －

横矢 恵里¹

¹ (大阪市立東中学校)

家近 早苗²

² (大阪教育大学大学院連合教職実践研究科)

【問題と目的】

2020年4月初めから5月末まで、全国で新型コロナウイルス感染拡大防止対策として、緊急事態宣言が表明された。大阪市の公立学校は休業措置が取られ、生徒は授業に参加できず、おおよそ2か月間授業を受けることができていない状況であった。

生徒が自分の学習を振り返り次に生かす情報を引き出す活動である「教訓帰納」は、学習成果や学習意欲を高めることに有効である(植阪,2010)ことから、短時間の登校でも生徒が自宅学習と授業とを往復しつつ理解できるような授業内容を検討することが研究の目的である。

【方法】

期 間：2020年4月から2020年8月

対象者：大阪市内A中学校の1年生3クラス(78人)

方 法：第一発表者の理科の授業に、スクロウの条件的知識(Schraw,1998)を活用したプラン(表1)を組み込み、家庭学習での予習、授業での小テスト、授業後の振り返り教材を作成する。

表1 スクロウの条件的知識(Schraw,1998)を活用したプラン

子どもの活動	具体的に提示した目的と方法
①教科書を音読する	小学校の振り返りや写真を大まかに見る。声に出して読みながら、教科書の太字に赤線を引く。
②教科書を音読する(2回目)	自分が知っている知識や、知らないことが何かについて考え確認する。
③情報を統合するため小テストを行う	主要なアイデアを関連付ける、テーマを理解するために用いる。
⑤小テストの解説を浮け、内容をまとめる	科学的な考え方を理解し、予習してきた内容と関連付ける。

【結果】

「植物の体のつくりと働き」の単元において、「子房があることで、被子植物が子孫を残すのに都合がよいのはなぜですか」という課題に対して「胚珠を守るた

め」「種子が傷つかないようにするため」という意見がどのクラスからも出てきた。A組では、「動物に種子が食べられないようにするため(生徒A-26)」という意見が出たのちに、「動物(鳥、リス、クマなど)に果実を食べてもらって、種子を遠くへ運んでもらいたい(生徒A-39)」という反対の意見が出てきて、「どちらが正しいのだろう」という疑問が湧いた。B組ではA組の意見を提示してから、補足説明をするよう促したところ「動物に果実が食べられた方が、子孫を都合がよいのではないか」と意見がまとめたのちに、「その場で災害等が起きても平気なように(生徒B-20)」「植物たちが自分の陣地を広げるため(生徒B-18)」「子孫と自分が栄養を取り合ってしまうと生き残れないかもしれないから、ここではないどこかを運んでもらいたい(生徒B-4)」と、科学的な考えを、予習してきた内容と結び付けることができた。授業後の振り返りシートでは、「普段食べている野菜がどこの部分なのか知ることができて良かった」「家や給食で食べている食材がどのつくりなのかよく分かった」という記述が見られた。

【考察】

石井(2015)は、「知っている・できる」レベルの課題が解けるからといって、「わかる」レベルの課題が解けるとは限らないし、「わかる」レベルの課題が解けるからといって、「使える」レベルの課題が解けるとは限らないことを指摘している。家庭学習を組込むことで、身近な話題から被子植物と裸子植物を比較することができ、日常生活から科学的に思考し、知識を「使える」レベルにできたのではないかと考えられる。

家庭学習と授業の垣根を払う学習を組み込むことで、授業を終えた後も家庭に学習の場を持つことができるような繋がりが生まれるのではないかと。

【引用文献】

Schraw,G (1998) Promoting general metacognitive awareness. *Instructional Science* 26 pp.113-125